

1. はじめに

日本は、急峻な地形、地震の多発、多くの活火山の存在、梅雨期・台風期の大雨、冬季の豪雪など、土砂災害に対して極めて脆弱な自然条件を有する国である。したがって、古くから日本人は土砂災害に悩まされてきたはずである。砂防の始まりは、大同元年(806年)の勅か弘仁12年(822年)の太政官符であると言われていたが、実際どのような災害が発生していたのかはほとんど知られていない。

そこで、本論では、過去にどのような土砂災害が発生し、またその現象や被害はどのような言葉で表現されていたかについて、災害史研究の成果を参考に古文書を参照しつつ考察した。

2. 土砂災害の意義

土砂災害という言葉は昭和52年に建設白書と防災白書で使用されたのが最初で、これまで、土砂災害防止法を除いて言葉の明確な定義はなされていない。土砂災害防止法においては、「土砂災害とは、急傾斜地の崩壊、土石流又は地滑りを発生原因として国民の生命又は身体に生ずる被害をいう」と定義されている。この中にある、急傾斜地の崩壊、土石流、地滑りの各現象以外にも土砂が自然営力で移動する場合もある。例えば、傾斜度が30°未満の斜面の崩壊や火山噴火による火山噴出物などがある。

本論では、これらの諸現象を全て含めて、自然の傾斜した土地から土砂等が自然営力によって移動する現象を土砂災害として扱う。

3. 古代から近世までの土砂災害

3.1 史書などによる土砂災害史

災害史を全国的な視点で整理した資料として、昭和13年に東京府(当時)から発行された「天災地變に関する調査」がある。本書は、予防的対策の必要性を説くため過去の災害発生状況を整理広報することを目的に編纂されたものであり、複数の災害史研究文献を参考にしながら、一次資料(史書などの古文書)について文献調査を行っていることから各災害についての記述は信頼性が高いと考えられる。

記載の災害は、552年から1867年までであり、第一編では地震・津波・噴火、火災、風水害、凶作などの分類で275ページにわたり年表形式にまとめている。第二編では、年表に記載した災害ごとに一次資料の記述が紹介されている。

このうち、原因が大雨による土砂災害と考えられるものを表-1に整理した。ここでは、10、11、14、15世紀の記録が無いが、国の統治権力の強弱などその時代における災害と社会全体の動向との相互関係に留意する必

要がある。

表から、これらの全ての災害において、「山崩れ」が使われている。すなわち、古代から山崩れと称する土砂災害による被害が発生し、この現象が日本では人間社会に古くから影響を及ぼしていたことを立証している。また、大雨によるものの他に、地震、火山噴火による災害をにも「山崩れ」という言葉を使用した記述が多く見られる。

土砂災害について最も古い記録がみられる続日本紀は、日本書紀に続く第二の国家の史書として、西暦697年から791年までの95年間の歴史を記述したものである。表中の779年の災害は、「八月己亥、因幡の國言う。『去る六月廿九日暴風甚雨忽ちにして山崩れ、水溢れ岸谷地を失して人畜漂流し田宅損害して飢饉せる百姓三千餘人あり』と。仍ち使を遣はして之を賑恤せしむ。」と記述されており、この災害はおそらく土石流によるものであると推測できる。また、地震による災害としては、例えば734年に「地大いに震ひ天下百姓の盧舎を壊せり。壓死者多く山崩れ川擁て折裂する處無數なり。」と記述されており、この災害はおそらく山崩れによる河道閉塞が生じその決壊が発生していることが推測できる。

3.2. 江戸時代における土砂災害

江戸時代の土砂災害については、「山崩れ」が多く使用されているが、「山津波」と「山潮」も使用されていたことが、当時書かれた書物により確認できる。なお、「山津波」は、室町時代末期に「津波」が存在していることから、1600年代以前にも存在していた言葉である可能性がある。

1795年司馬江漢著の和蘭天説の中で、「地震ハ(中略)山急ニ頽或ハ地裂、村邑陥ルコトアリ、皆震ノ輕重に由テ異変ヲナス、俗ニ螺ノヌケ出、或ハ山津波ト云」と「山津波」を使用している。また、同じ1795年橋南谿の西遊記の中で、「大雨後の洪水、又は山津波なども、山ちかくの地に多きものにて」と「山津波」を使用している。このように、1700年代後期には、「山津波」という言葉が全国的に使用されていたことが分かる。

また、1716年の葉隠という書物では、長崎県東部を流れる本明川で山崩れによって発生した土石流を「山潮」と称している。

4. 「山崩れ」から進化した言葉

1600年頃より以前は、おそらく土砂災害については「山崩れ」でひとまとめに表現されていたものと考えられる。例えば、日本最初の本格的な国語辞典である「ことばのはやし」(1888年)には、「山崩れ」は「やまの、くづることをいふ。また、おほきくくづるをいふ。」と記述されており、また「言海」(1889年)には「山津

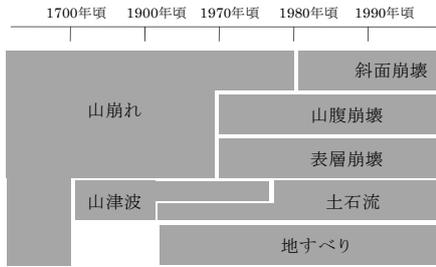


図-1 山崩れからの用語の細分化経過

波」を「山ノ崖ナドノ大ニ崩ルルコト」と記述しており、明治時代に入ってから一般国民には土砂災害を「山崩れ」と称していたことがわかる。

明治時代後期には砂防研究者がヨーロッパに留学するようになり、大正時代には「山崩れ」についての分類に関する研究がなされている。その後、砂防学会誌に掲載された斜面の崩壊に関する論文の名称をみると、「山崩れ」は1983年に使用されたのが最後であり、逆に「表層崩壊」が1967年、「山腹崩壊」が1971年、「斜面崩壊」が1977年、「深層崩壊」が1997年から使用されるようになり、1990年以降は「斜面崩壊」が多く使用されている。

斜面の崩壊現象に関する研究の進展と社会の認識の深まりにより、現象を表す言葉が細分化してきたといえる(図-1)。

5. おわりに

日本は、古代から土砂災害により被害を受けていることが、文献により明確になった。そして、その呼称は「山崩れ」のみであったものが、特に近代以降は現象の科学的解明が進むにつれて、その呼称も細分化されてきた。一方で、平成20年6月の岩手・宮城内陸地震では多くの斜面崩壊が発生したが、マスコミ報道の大部分はこれらの現象について、専門家は使用しない用語である「土砂くずれ」を用いて表現した。斜面崩壊現象についての呼称が今後の研究の進展によりさらに細分化されていくことも予想されるが、土砂災害に対する被害軽減の観点からは、国民にとっての分かりやすさに留意することが必要であると考えている。

<参考文献>

西本晴男：土石流に関する表現方法の変遷についての一考察、砂防学会誌、Vol.59、No.1、p39-48、2006
 池谷 浩：歴史上の人物を通して見た日本砂防史、社団法人全国治水砂防協会、p.2-18、2008
 東京府学務部社会課：天災地變に関する調査(上) pp.423(下) pp.374、1938
 新日本古典文学大系 13 続日本記二、岩波書店、p.277-279、1990
 新日本古典文学大系 16 続日本記五、岩波書店、1998
 和蘭天説、司馬江漢全集第三卷、八坂書房、p.66-68、1994
 東西遊記2、橘南谿、平凡社、p.105-107、1974
 日本思想体系 26 葉隠、岩波書店、p.360-361、1983

表-1 古代から近世までの土砂災害(大雨)

西 暦	場 所	記 述	出 典
727年	安房、上総	10月大風あり。山崩れて壓死者70人	續日本紀卷10
743年	出雲國	7月5日山岳頽崩し盧舎を壊ち田畝を埋む	續日本紀卷15
779年	因幡	6月29日暴風甚雨忽ちにして山崩れ、水溢れ岸谷地を失し	續日本紀卷35
797年	大和國平群郡河内國高安郡	霖雨久しく山阜頽崩し損害甚だし人家を埋む	日本逸史卷6
828年	京中	5月23日降雨殊に甚だし。京中往路山崩れ	日本逸史卷36
888年	信濃國	5月8日信濃國山頽れ唐突として六郡の城盧地を拂ひて流漂し	日本紀略前篇20
1151年	京中	8日大風洪水丘陵崩壊。28日大雨松尾社神山頽れ	本朝世記卷39
1190年	大倉山	5月15日甚雨休止せず大倉山振動し樹木多く顛倒し巖石頽落し其跡俄かに細流と爲る是龍の降れる也と言ふ	吾妻鏡卷10
1233年	—	8月6日甚雨大風、山岳大に頽毀し男女多く横死す	吾妻鏡卷46
1260年	—	6月1日疾風暴雨、山崩れ人多く磐石の爲めに壓死さる	吾妻鏡卷49
1265年	龜谷、泉谷	6月10日終日降雨甚し、山崩あり人馬多く土石に壓せられ死す	吾妻鏡卷52
1684年(享元年)	—	風雨有る毎に土砂を崩潰して水流之が爲に游滞壅塞す	憲教類典卷28徳川理財會要
1680年(延寶8)	青森地方	8月6日大風雨、暴風雨のために山崩れ多し、八戸藩死者4百	青森縣史1
1701年(元祿14)	丹波綾部、若州小	7月21日關大助領風雨の節、領内湯の山崩れ、死者14人、怪俄4人	御日記271
1703年(元祿16)	上總	山崩れ死者100人に及ぶ	談海續篇卷1
1742年(寛保2)	関東	8月大風大雨、武蔵下總下野上野信濃も大水、朝間山崩れ	有徳院56
1778年(安永7)	比叡山	7月京甚雨迅雷して比叡山より泥水騰沸し、崖崩れ屋頽れて死するもの六百餘人	浚明院39
1783年(天明3)	—	7月10日より14日、山崩れ43ヶ所、川崩れ9ヶ所	1話1言28